

ポリュビオス「歴史」の中に見出される 格言的表現について

竹 島 俊 之

ポリュビオスの「歴史」は第二カルタゴ戦争の開始(220 B. C.)から、ピュドナの戦い(168 B. C.)によるマケドニアの崩壊に至る間、どのようにしてローマが当時の世界の支配者となったか。又その世界史的過程の原因を描出したものである。がその大著も大部分は散失し、現在、完全な形で伝承されているのは、1～5巻のみで、他は後世の引用や抜萃によるものである。

1～5巻の標準的な写本となっているのは、947年に編纂された *der Vaticanus Gr. 124*。その他の抜萃に関して重要なものは、*der cod. Vaticanus Urbinas Gr. 102*。これは、1～16巻と18巻からの抜萃を収めている。その他の抜萃の大部分は、コンスタンティヌス7世(912～950)によって集められた抜萃集によるものである。

これらを基にして、1903年 Büttner-Wobst が編纂したものを、これからの研究のテキストとして使用する。¹⁾

彼の使用した言語は、当時の共通語であったコイナーと、非常に似寄った特徴を持っていることは早くから指摘されているところです。即ち俗ラテン語の特徴でもある、碑文の文体との一致。実詞の前置詞句による書き換え。合成語、自由な語形成の使用。表現の殷勤さ等に、それは現われております。更にポリュビオスの言語とコイナーの関係を示す為に、Cajus Fabricius が *Johannes Chrysostomos* (4世紀 A. D.) の言語に就て行った語法研究論文を、こゝで参照しておきましょう。²⁾

彼はこの論文で *Joh. Chrys.* の古典主義を証明しようとし、その際、統語論的要素として、
a. 分離属格、 b. 代名詞の用法 — 拡大使用の *heaut* — 、*hostis*。 c. 場所の副詞を取り挙げています。

「動き」と「分離」を表わす動詞における「分離属格」が帝政時代の作家でどのように使用されていたかは、未だ余り解明されていないのですが、³⁾ 彼は *Joh. Chrys.* の言語を調査し、次のような一つの結論を得ています。「動き」を表わす動詞では *Joh. Chrys.* は殆んど完全といって良い程、属格を用いている。⁴⁾ 特に重要なのは、属格形式が既にアッティカ散文には現われない場合に、彼がそれを用いている動詞であるとし、又 *Septuaginta*、ブトレマイオス朝バビルス、

Polybios からは次のような動詞に同様の傾向を見えています。

Nach dem von Helbing gesammeltin Material stehen in der LXX 4 Genitive, bei Apautomoleen 4 Macc 12, 16, Apopíptein Judith 11, 6 (beide nicht mit Gen. in att. Prosa), apelaúnein Sap 17, 8, ekságein 4 Macc 8, 23. Aus den ptolemäischen Papyri verzeichnet Meyser ([2, 227—229) 13 Genitiv bei 7 Verben : Apelaúnein, Apospásthai, ekbaínein, ekpíptein (S 237) und die in att. Prosa nicht mit Genitiv vorkommenden apobaínein, apoxoōrein, ekxōrein. Aus Polybios kann ich, ohne auf Vollständigkeit Anspruch zu erheben,⁵⁾ 7 Verben anführen, von denen einige nicht bloss vereinzelt den Genitiv haben, so vor allem ekxōrein, das 42 mal mit Genitiv (nicht in att. Prosa, aber bei Hippokrates) und 12 mal mit Präposition steht, weiterhin apopíptein (5 mal Gen.; nicht im att. Prosa, aber bei Herodot), apospān (5 mal), ekpíptein (1 mal) und die in attischer Prosa nicht mit dem Genitiv vorkommenden apaírein (1 mal), aphálllesthai (1 mal), ekselaúnein (1 mal, s. oben s. 31).

Aus dem NT zitieren Blass—Debrunner (181) ekpíptein, das zweimal mit Genitiv, nie mit Präposition steht.⁶⁾

勿論、Joh. chrys. の用法と Polybios のそれとが全く相対した傾向を示している場合もある。この分離属格が Polybios において、どのように使用されているかは別の論文で取り扱うことにする。こゝでは、ポリュビオスの言語が LXXや Meyser の集めたブトレマイオス王朝時代のコイナー資料の言語と多くの点で軌を一にするものであり、コイナー研究にとってもポリュビオスの言語の研究が重要であることを指摘するに止めておこう。

その研究の手始めとして、先ず格言的言い回し、次に引用語句の研究、更には比喩表現の面からポリュビオスの言語研究を行なっていこうと考えております。

これは、ギリシア文学に特有な事象、即ち、繰り返し現われたアッティシズムの中に反映している古典の影響力を考慮するためです。言い換えるならば、ポリュビオスが持っていた教養、それが作品形成の上でどのように反映しているか。エウリピデス、アリストファネス、更にはメナンドロス

の言語のコイナーへの影響。比喩表現を通しては、当時の民衆の世界観を探るためであります。

ヘレニズム期に存在していたと推定される格言集については、M. E. Miller が Athos の 僧図書館で発見した Codex Athous: Suppl. Grec. No. 1164⁷⁾ と Leutsch—Schneidewin が編集した Corpus Paroemiographorum Graecorum [— Zenobius, Diogenianus, Plutarchus, Gregorius Cyprius, — Diogenianus, Gregorius, Cyprius, Macarius, Aesopus, Apostolius et Arsenius, Mantissa proveriorum が参照される。格言集の研究に関する論文としては、Cohn, Leopold: Zu den Paroemiographen, Breslau 1887。Crusius, O: Analecta ad Paroemiographos Graecos, Leipzig 1883。Crusius, O: Plutarchi de proverbiis Alexandrinorum, Tübingen 1887。Crusius, O und Cohn, L: Zur Handschriftlichen Überlieferung der Paroemiographen, Göttingen 1892。Crusius, O: Paroemiographica 1910。Jungblut, H: Über die Sprichwörtersammlungen des Laurentianus. を参照する。

ポリュオスにおける格言的表現を考える場合、*kata tēn paroimían* と *kata tò dē legómenon*, その他にこうした表示の全く無いものゝ、三種が考えられます。最後のものは、彼がそれを無意識のうちに用いているものであり、それらは、民衆の言語生活の中に深く根を下ろしているものと考えられます。*kata tēn paroimían* と *kata tò dē legómenon* とでは、後者がより民衆的なものと考えられます。これに関して、この面での唯一の研究者 Carl Wunderer は、面白い現象を見出しております。⁸⁾ 即ち9巻迄は、*tò dē legómenon* しか見出されず、それ以降、始めて *kata tēn paroimían* が使われている。この事より彼は、ポリュオスが「歴史」を書き進めるうちに格言集の存在に気付き、9巻以後それを利用したのだと帰結しています。その例証として 15, 4, 11。 15, 16, 6。 15, 26a, 1。 を取り挙げもし格言集が存在していなかったら、このように続いた箇所、同じような言い回しをする筈がないと述べています。15, 4, 11: *diò parakatasxòn tòn ídion thmòn kai tēn epì toĩs gegonósi pikrían, epeiráthē diaphuláksai, kata tēn paroimían “patérōn eũ keímena érga”* 「自分の怒りと、起った事に対する憎しみを押えて、格言に従って『祖先の範』を守ろうと努めた。」

15, 26a, 1: hóti Deínōna tōn Deínōnos epaneíleto Agathoklēs, kai toũto éprakse tōn adíkōn érgōn, hōs hē paroimía phēsi, dikaiótaton 「アガトクレスはデイノンの息子、デイノンを殺した。格言で言う如く、不正なる行為のうち、最も義なることを。」 同じ表現が 4, 18, 7 では paroimía の表示無しで用いられている。

hoi d' Aitōloì dià taútas tās aitías taxéōs egkrateĩs genomenoi tēs póleōs, tōn adíkōn érgōn hén toũt' épraksan dikaiótaton prōtous gār toūs eisagagóntas kai prodóntas autoĩs tēn pólin katà spháksantes diērpasan toūs toútōn bious 「エルトリア人はこういうわけで、町の支配権を握った時に、すぐ、不正なる行為のうち、最も義なる行為の一つを行った。というのは彼等は先、彼等を導き入れ、その町を彼等の手に渡した人々を打ち殺し、彼等の財産を取り上げた。」

15, 16, 6: taútōmaton antéprakse taĩs epibolaĩs tōn agatōn andrōn, d' hôte pálin katà tēn paroimían esthlōs eōn hállou kreittonos antéstuxen.

「偶然が、最も優れた人々の計画を挫いた。格言が述べているように、『勇敢な人も、他のもっと強きものに会おう。』」

次に Miller, Leutsch に編纂された格言集の中に見出されるものを、二、三挙げてみよう。 10, 32, 11: deĩ gār en Karì tēn peĩran, hōs hē paroimía phesín, ouk en tōi stratēgōi gíneothi

「格言が言う如く、カリ人で経験したことが、軍司令官の場合に起こってはならないから」

M. I. 7: en kari ho kíndunos. Kock. CAF, p. 478⁹) : en Karì ton kíndunon peirasthai. Z. ■. 59: en Karì tōn kíndunon これには次のような説明が付けられている。 epi tōn en eutelési tas peiras poiouménon. Káres gār emisthophórēsan prōtoi Alloi tēn paroimían tithéasi epi tōn eukataphronétōn phasì gār toūs Kāras prōtous anthrōpōn misthoũ strateúsasthsi toūs oũn tò argúrion didóntas protáttein toūs Kāras heautōn, hos méllontas apothnēskein hupèr tōn misthouménōn Eírētai oũn dià toũto hē paroimia.

「軽卒に事を行う人々に対して。というのはカリ人が真先に俸給を受取ったから。他ではその格言は軽蔑さるべき人々に対して用いられる。というのはカリ人は俸給のために、真先に戦役についた。

ところがお金を与えられた人々、即ちカリ人が戦闘の先頭に立てられた。そこで報酬をもらって仕事についたために死ぬ運命に陥った場合に、この格言は用いられる。」

Pol. 12, 12_a, 1: Epì tōn athetoúntōn tās homologías propherómetha táutēn tēn paroimían “Lokroi tās sunthékas.”

「約束を否認する人々に対して以前から『ロクロス人が契約を』という格言が用いられる。」

M. I, 3 Lokroi tas sunthékas = Z. V. 4。ゼノビには次のような説明が付け加えられている。 parà Lokroĩs toĩs Epizephurióis, hōs phasin, egéneto Sáleukos nomothétes hōs nómon ethēke, etheke, suggraphēn epi tōn daneismátōn mē gínethai. Hoten pollōn arnoumenōn tà sumallágmata, epì tōn pseudoménōn he paroimía ekrátēsen 「サレウコスがエビゼビュリオスのロクロス人の法制定者となった時のこと。彼は貸付金に対する契約書は作らるべきでない、との法を制定した。多くの人々が契約を否定するに到った時に、偽りを言う人々に対して、この格言が使われるようになった。」こゝではポリュビオスのこの格言に対する解釈とゼノビのそれとは完全に一致している。

[註]

- 1) Polybii Historiae ; Theodorus Büttner-Wobst, B. G. Teubner Stuttgart 1963.
- 2) Zu den Jugendschriften des Johannes Chrysostomos : Untersuchungen zum Klassizismus des vierten Jahrhunderts von Cajus Fabricius. Lund 1962.
- 3) ebd. S. 24
- 4) ebd. S. 31
- 5) Polybios に関しては、Mauersberger : Polybios—Lexikon 中、既刊の Band I, Liefer. 1. (a—g), Liefer. 2. (d—z). Berlin 1956, 1961 が使用されている。現在、Liefer. 3. (ē—k) 1966 迄出版されている。
- 6) Cajus Fabricius S. 33
- 7) これは彼の Mélanges de littérature grecque Paris 1868 の中に収められている。
- 8) Polybios—Forschungen. Beiträge zur Sprach und Kultur Geschichte von Carl Wunderer.

1. Teil: Sprichwörter und sprichwörtliche Redensarten bei
Polybios. Leipzig 1898. S. 7 ff.

9) Kock: Comicorum Atticorum Fragment 3 vol. Leipzig 1880—8

(西日本言語研究会第一回大会研究発表)

Zusammenfassung

UBER DIE SPRICHWORTER IN HISTORIAE VON POLYBIOS

Ich habe in der vorliegenden kleinen Abhandlung dargestellt, welche Beziehung die Sprache der Polybios zur Geschichte der griechischen Sprache gehabt und wie dieselbe Forschung in Bezug auf die Koine wichtig ist. In der Sprache der Koine gibt es viele Frage, die in grossen und ganzen noch ungeklärt sind. Neulich hat z.B. Cajus Fabricius in seiner Abhandlung mit Recht den Fehler der Blass-Dèbrunner N.T. Grammatik nachgewiesen, die für N.T. Forschung doch massgebend ist. Zunächst habe ich deshalb die Sprichwörter behandelt, weil es nötig wäre, wenn man die Sprache der Koine untersucht, die Einflüsse der Antiken auf die gegebene Texte in Betracht zu ziehen.

Dabei werde ich in die sog. paroemiographischen Probleme eintreten: ob es nämlich einige Sprichwörterammlung wirklich in dieser Zeit gehabt habe, wenn dem so wäre, was für eine Gestaltung es habe.

Toshiyuki TAKESHIMA